

たたかう 戦う……・戦争や勝負や競技、優
劣を競う
闘う……葛藤や困難に打ち勝と
うと努める

ハッシュタグ#は、シャープ#ではない。
ハッシュタグ#は、横棒が水平の番号記号。

雨模様は「あめもよう」とも「あまもよう」とも読みますが、「雨催い」が変化したものと
言われており、今にも雨が降り出しそうな曇り空のことです。つまり、**雨は降っていません**。
「模様」も「空模様」といえば、実際の天気、空の様子のことですから「催い」が「模様」に
変わったことが「誤解」を生んだのかもしれない。

・役不足

「割り振られた役に不満をもつこと、役割が実力に
比べて軽いこと」が本来の意味ですが、「力不足」
の意味に使う人もいます。謙遜のつもりで「そのポ
ストは自分には役不足で」と言うと、高慢な態度に
見られてしまうかもしれません。

投稿欄で「想う」という字を、タイトルを含めて使いたかったそうですが、毎日新聞の投稿
欄担当者にこう言われ、諦めたとのこと。「想う」は「おもう」と読ませられない、使う
にはルビが必要になる、見出しにルビは付けられない、と。

後日、掲載された文章を見た投稿者の周りの誰もが「想う」がいいと言い、国語の先生にも
『思う』では気持ちが伝わらない。ルビの問題ではない』と言われたそうです。
「普通に使い、誰もが普通に読んでいる、きれいで、意味深い『想う』が使えない不思議が、
納得いきません」とのことでした。

これに対し、校閲の用語担当者の回答は、読者の方の言葉を大切に思う気持ちが伝わったこ
と、貴重なご意見として承ったことを書いた上で、要約すると以下のような説明をしました。

常用漢字表の「想」に「おもう」の読みが掲げられておらず、義務教育の範囲にも入って
いません。新聞は基本的に義務教育で学ぶ範囲の表記を心がけていますから、「想う」は認めて
いないこととなります。

一般的には「想う」は多くの人を使う平易な表記であり、国の決めた線引きに新聞が従うこ

とはないと思われるかもしれませんが。しかし、「想う」を認めると、「思う」との使い分けの線引きをどこに定めるかという問題に突き当たります。

新聞ではできるだけ冷静で客観的な文体で書くことが求められます。戦前の新聞ではかなり情緒的な文章があり、日本人に好戦的な気分をあおった一面があるという反省に立っています。

つまり、「斉」と「齋」は全くの別字。一斉、書齋。

斎……旧字体は齋。音読み「セイ」。「きちん
とそろろう・そろえる」ことを表し、「ひとしい」
「ととのえる」の訓がある。「一斉」「斉唱」
などと使う。
齋……旧字体は齋。音読み「サイ」。「けがれ
を払う」ことを表す漢字で「ものいみ」の訓
がある。転じて「静かに過ごす部屋」という
意味となったのが「書齋」の例。
(田満字二郎著『漢字ときあかし辞典』研究
社より)

太陽よりも巨大な星は死ぬと超新星爆発を起
こす。爆発で放出されるニュートリノは光よ
りも速く星から飛び出す。

こういった内容の文について、翌日「『光よりも速く』などであるのは『光よりも早く』の誤りでした」という訂正記事が載ってしまいました。

光よりも速いスピードで飛ぶのではなく、光よりも先に飛び出す、つまり光よりも「早く」飛び出すという意味で書かれた文でした。

「早い」でなければ、光よりも速いものがこの世に存在することになってしまいます。

・追撃

「終盤、2本塁打などで追撃したが、逃げ切られ

た」「2社の提携で、業界最大手を迫撃する」など、原稿によく見かけます。しかし、「**敗走する敵・劣勢にある敵を追いかけてさらに攻めること**」が本来の意味です。どちらの例も、相手が負けたわけではないので「終盤、2本塁打などで**追いつけたが、逃げ切られた**」「2社の提携で、業界大手を**猛追する**」のように直します。

「優勢なほうを追い落とそうとすること」（三省堂国語辞典）という新しい語釈を加える辞書も出てきており、スポーツ紙などでは容認しているところもあるようですが、毎日新聞としては今のところ本来の使い方限定するようにしています。

「ください」をつけたいなら、「伺わせてください」でよいはずなのに、「伺わせてください」と「さ」を入れてしまうのが「**さ入れ言葉**」です。

「見る」の場合は、「見させる」＋「ください」で「見させてください」となります。一方、「見せる」という「見えるようにする」意味の下一段活用の動詞もあります。そこで、わざわざ「見る」に使役の助動詞をつけて言うのではなく、「見せる」の連用形「見せ」＋接続助詞「て」＋「ください」の「見せてください」も使われます。

直截ちよくせつ、(慣用読み) ちよくさい

直裁ちよくさい